

要求掘り起こしと動きを作り出す

「大丈夫かな、これで」
 一昨年の年末から年始にかけて、会員から出てくる計画書を見て、ちょっと不安になった。ここ一二年の間に入会した会員が、けっこう雪山に入るパーティーのメンバーに交じっている。この季節は、近郊の1000mも雪である。彼らは県連盟の氷雪技術講習会にも参加していないはずだし、冬山が無雪期とどう違うか、そこからどんな困難が発生するか、それを克服するために必要とする知識や技術、装備についても、ここ何年か、会の中で冬山について、系統立てて学習する機会は作られていない。

それでも、計画書は出されて来る。彼らを「連れて」行っている連中が、きちんと冬山の基本について教えてくれているようには見えない。

「みんな見よう見まねで装備を買って、ほいほいと雪山に出かけているけど、いいのかな。ピッケルやアイゼン買ったからって、雪山に入れるってもんじゃないぞ」で、昨年二月、何年ぶりかで、「雪山入門」をテーマにした山行と、その打ち合わせを兼ねて机上講座の機会を設けた。

今回は、会の中での学習の機会について考えてみたい。

見よう見まねの危なさ

「ホライさん、これ、違ってますよね」

古参の会員から声がかかった。机上講座で、冬山を構成する要素と、そこから出てくる冬山特有の困難、それをクリアするために必要な知識と技術、必要になってくる冬山の装備について解説した後、持参した自分のピッケル、靴、アイゼンなどを点検し、そのつけ方、持ち方などについて練習した。ここ数年、装備はアレがいる、こんなものを揃えろといひ、という説明はされても、何のために必要で、どうやって使うか、はそれほど詳細に説明されてこなかった。実技前のチェックの場でも。見ると、ピッケルにつけられた肩掛け式のバンドの、肩にかける部分がピッケルの頭に固定されている。このピッケルの持ち主は、これまでどうやってピッケルを使っていたんだ。

「逆じゃないか、誰のピッケルだ？」

聞くと、退会した会員から山道具一式を譲り受けた会員が、その中に入っていたピッケルをこの日のセミナーに持ってきたらしい。それを見た先輩会員がバンドのつけ方が変なのに気づいた、というわけだ。つま

り、このピッケルのもとの持ち主は、会員として雪山に入っていないながら、冬山の基本についての系統だった学習の機会もないまま、その使い方も、おそらくは誰にも教えてもらったことがなく、したがって、ピッケルのバンドのつけ方が間違いであることも誰からも指摘されることがなかったのではない。

こんな例を見ると、計画書のメンバーの顔ぶれを思い浮かべながら感じた不安は、それほどのはずれではなかったようである。

昨年の二月、厳冬の終わりに急ぎよ実施した雪山入門山行には、比較的新しい会員を中心に15人が参加し、雪山での歩行技術や装備の基本的な使い方、雪のブロックの掘り出し、雪洞やイグルー造りなどを行った。雪山の入り口に立つてもらったとはできた、と思う。

会中の「学びたいという要求」

そして十二月。「今度は厳冬期に入る前に実施したい」と、毎月一回、会で実施されている教育セミナーと定例山行を「雪山入門」の机上講座と実技にあてた。前回の状況から山域も規模も同じくらいだろう、と

私の登山

22

半田ファミリー山の会代表
 洞井 孝雄

ワタシと登山

どんな山がやりたいんだ？

踏んでいたのだけれど、今回はなんと30人を超える参加があった。参加者の顔ぶれは、①まったくの初心者、②雪山の経験はあるが、系統的に学んだことのない準初心者、③かつて積雪期の合宿などにも参加したことがあるが再度「おさらい」をしてほしい要再教育の経験者、④昨今はよく山に入っている一定の知識も技術もある会員たち、の四つである。④の中でも、きちんと教えることのできるメンバー、初心者を見ることがのできるメンバー、一通り自分のことのできるメンバーなどさまざまである。

る。①③に分類したひとたちに④のメンバーを配置し、条件が許せば、パーティーごとに、基礎から応用までアレンジ可能なパーティー分けを考えることになる(余談だが、参加者の分類は、全員のこれまでと現況を知っていなければ難しい)。「会ができたころは、冬山に入る人間が私ひとりしかいなかった。冬山は楽しいよ、きれいだよ、とひとりずつ声をかけて、近くの山に無理やり引っ張っていった。冬山をやる仲間を増やしてきました。冬合宿のパーティーを会から出すのに三年かかりました。それ

みんなで記念撮影(西穂高口で)

を思うと、今日は30人以上も会員が参加してくれている。夢みたいなことで、時代も山も変わったんだな、という気がします」

セミナーの冒頭、こんな話をした。当初予定した山域に雪がなく、直前に西穂高岳周辺に山域を変更したが、山域に変わって参加者が増え、上講座と実技(定例

山行)をセットにした企画だったにもかかわらず、「学習」の機会として両方に参加した会員が30人以上もいたということである。会の中に、きちんと学びたい、学び直したい、という要求がこれだけ潜在的にあつた、というのは予想外(失礼!)のことだ、働きかけをすればそれに応える層が一定数いる、いや、こんなにいたのだということに驚き、喜びもし、新しい発見をした思いでもあつた。

庄まで登り、小屋の脇の斜面で、アイゼンとピッケルを使って上り下りを繰り返したにとどまったのだが、それでも基本をきちんと学ぼうと呼びかけなければ、こんな驚きも発見もなかった。登山ではないが、組織外の若いひとたちに向けて技術継承の動きをはじめた山岳団体もあると聞いている。

今回の実技は、積雪量が少なく、無風の暖かい一日で、全員で西穂山

りだすことも大事になってきていると思うのだがどうだろうか。

実技を終えて西穂山荘へ



ガス・カートリッジ

オプティマス、ホエーブス、アンデルス、コールマン、ラジウス……かつて、テントで使われていた石油もしくはホワイトガソリンを燃料とするストーブ(火器)の名前である。すでに博物館行きとなったものばかりだが、あのバリバリ、ゴーゴーというストーブの音は、いかに冬のテントの中で熱源になっているという安心感や温かさを感じさせてくれた。就寝前の燃料の充填、ガソリンを気化させるためのプレヒート、タンクから燃料を押し出すためのポンピングなど、火器の種類によってさまざまな手順と慣れが必要で、事故も多かったが、最近ではカートリッジを交換するだけで、そういった職人技から解放されるガス・ストーブに席捲されてしまった。当初は、ガス・カートリッジも今ほど使う季節や気温に合わせた種類はなく、気温が下がると燃焼効率が悪くなったり、ガスが気化することでカートリッジそのものが冷やされて、燃焼しにくくなることから、ブースターという燃焼部の熱をカートリッジに伝えて燃焼を助ける器具も出ていたのだが、昨今は寒冷地用とかパワープラスとかいう低温下でも燃焼効率の落ちない仕様のカートリッジも増えた。ただ、冬なら何でもかんでも寒冷地仕様である必要もない。燃焼効率を上げる小物も出回っている。どんなカートリッジを使うかは、いつ、どこで、という条件と火力と燃焼時間、財布と相談しながら、賢い使い方をしたい。便利な時代だ。